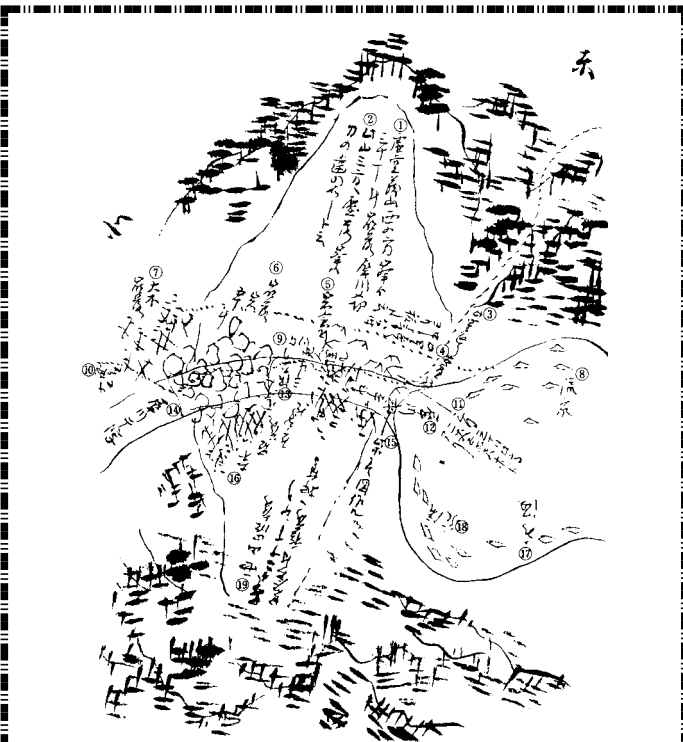


自然災害

江戸時代の文書に読む

災害列島・日本に生きる知恵



弘化四年に起こった「弘化大地震」（「善光寺地震」という）の記録『弘化大地震見聞記』（日本農書全集第66巻）に付された虚空蔵山の崩落の図。この崩落によって千曲川支流の犀川がせき止められた（図の右側の上流は湖のようになっている）。湛水は日々水かさが増し、二〇日後には大決壊を起こし、下流の川中島平は大洪水に襲われた。本書には、地震の発生から、山の崩落とその被害、復興事業、生活の安定から死者の供養まで、一〇枚の挿絵をまじえて一部始終が詳述されている。

中越地震、インド洋大津波など、自然災害の脅威をまざまざと見せつけられた2004年。そして2005年は阪神淡路大震災から10年。災害への備えと復興への知恵を災害列島に生きた先人に学びたい。

「災害列島」日本では江、く、被害体験をもとに、災害時代、地震や津波、大噴火などさまざまな災害に襲われた。その災害からたくましく再起した人びとが残した記録が、『日本農書全集』（全72巻）の「災害と復興」Ⅰ・Ⅱの巻（農文協）に収録された多くの災害記である。

それらの災害記は例外なく、馬が腹の皮を動かすようであり」

農民の観察眼がとらえた大地震の実情

これらの災害記を読んだ全巻、第66巻は、その観察眼が高度に発揮されたもので、最も強く印象に残るのは、日々の農業の中で鍛えられた農民の観察眼が、災害現象を的確にとらえていることである。

たとえば、現・奈良県月ヶ瀬村の庄屋六兵衛が書いた安政の大地震の記録「太地震難決日記」（日本農書全集第66巻）は、その観察眼が高度に発揮されたもので、最も強く印象に残るのは、日々の農業の中で鍛えられた農民の観察眼が、災害現象を的確にとらえていることである。

「馬が腹の皮を動かすようであり」

農民の観察眼がとらえた大地震の実情

「津波がやって来る様子を特に書き残しておかねばならない」

子孫への教訓『大地震津波実記帳』

現・三重県浜島町の庄屋・市兵衛は、同じ安政の大津波による津波の被害記録を残している。津波の被害は大きかったが、対応も早かった。市兵衛は反省も子孫への教訓も忘れない。

「今回の地震のさいには、その前の六月十四日の地震のときに津波がなかった。今度の油断していた者も多い」

「今から一五〇年以前の宝永四年に、このような大地震と津波があったという

「津波がやって来る様子を特に書き残しておかねばならない」

子孫への教訓『大地震津波実記帳』

現・三重県浜島町の庄屋・市兵衛は、同じ安政の大津波による津波の被害記録を残している。津波の被害は大きかったが、対応も早かった。市兵衛は反省も子孫への教訓も忘れない。

「今回の地震のさいには、その前の六月十四日の地震のときに津波がなかった。今度の油断していた者も多い」

「今から一五〇年以前の宝永四年に、このような大地震と津波があったという

「大噴火からの復興記録」

「浅間大覚書」

天明三年（一七八三）の浅間山の噴火は、浅間山噴火史上で最大級の噴火であり、日本の噴火史上でも最大級の噴火の一つだった。しかし、人びとはこの大災害を乗り越えて復興を遂げた。

この噴火と被災・復興の経過を知ることは、火山国日本に住む私たちに多くの教訓を与えてくれる。

「浅間大覚書」は噴火の開始から大噴火に至る経過、大噴火の様子、被災状況、幕府による検分・復興、周辺住民による援助・褒賞、噴火後の物価高騰、飢饉に至るまでを臨場感あふれる具体的なエピソードをまじえながら記述している。

この噴火によって、多くの死者が出、家屋が破壊され、耕地が埋められ、さらには道路や用水路なども破壊された。浅間山麓の村々は早急にその復旧をはからねばならなかった。しかし、それは人びとの手余った。そこで領主や代官にそれぞれ援助を願った。

「天明三年十月から救済事業を兼ねた田地の復興事業が鎌原村から始まった。復興費用として、田地一畝に

「大噴火からの復興記録」

「浅間大覚書」

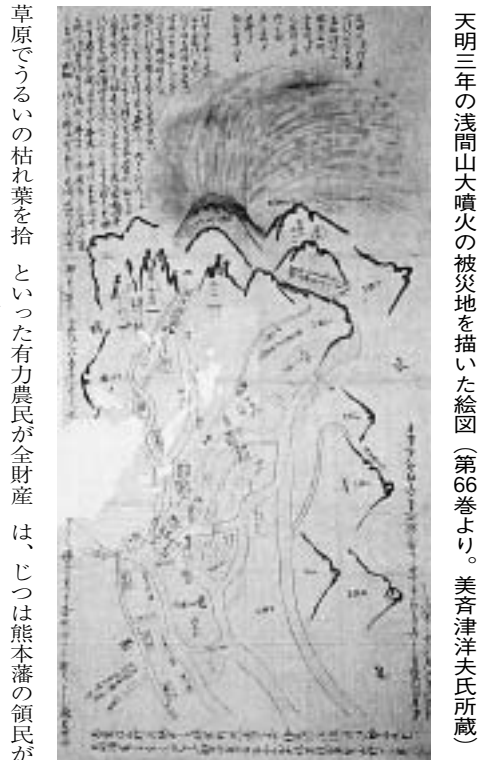
天明三年（一七八三）の浅間山の噴火は、浅間山噴火史上で最大級の噴火であり、日本の噴火史上でも最大級の噴火の一つだった。しかし、人びとはこの大災害を乗り越えて復興を遂げた。

この噴火と被災・復興の経過を知ることは、火山国日本に住む私たちに多くの教訓を与えてくれる。

「浅間大覚書」は噴火の開始から大噴火に至る経過、大噴火の様子、被災状況、幕府による検分・復興、周辺住民による援助・褒賞、噴火後の物価高騰、飢饉に至るまでを臨場感あふれる具体的なエピソードをまじえながら記述している。

この噴火によって、多くの死者が出、家屋が破壊され、耕地が埋められ、さらには道路や用水路なども破壊された。浅間山麓の村々は早急にその復旧をはからねばならなかった。しかし、それは人びとの手余った。そこで領主や代官にそれぞれ援助を願った。

「天明三年十月から救済事業を兼ねた田地の復興事業が鎌原村から始まった。復興費用として、田地一畝に



天明三年の浅間山大噴火の被災地を描いた絵図（第66巻より。美斉津洋氏所蔵）

語り継がれた「救荒食」の知恵

災害時、何より必要なのは食糧。足りなければ、食糧となる。そこで江戸時代から救荒食の知恵が連綿と語り継がれてきた。

中でも有名なのが「日本農書全集」に収録されている「岩手の一閑藩の藩医・建部清庵による『民間備荒録』」である。

「第2巻」と『備荒草木図』が食糧のもの。足りなければ、食糧となる。そこで江戸時代から救荒食の知恵が連綿と語り継がれてきた。

中でも有名なのが「日本農書全集」に収録されている「岩手の一閑藩の藩医・建部清庵による『民間備荒録』」である。



きからすつりの図。根からでん粉を取る方法を解説（『備荒草木図』より）

「日本農書全集」

全72巻・別巻1 A5判（二部B5判）、上製、箱入

● 揃価411100円、別巻240000円

「江戸時代 人づくり風土記」

全50巻（都道府県別編集） B5判、上製

● 揃価225000円

「日本の食生活全集」

全50巻（都道府県別編集） A5判、上製

● 145000円



名で記されている。「聞き書 鹿兒島の食事」では、代表的な救荒植物・作物として、そてつの澱粉・田芋・里芋と葉茎・すんな（雑草）だけのことが掲げられ、詳細な食べ方を書いている。

これら災害と復興・救荒食などの情報は、『近世日本地域づくり』二〇〇のテーマ（農文協刊）の「自治と助け合い、福祉」の項目、「日本農書全集 別巻」の「災害と飢饉」の「収録農書」一覧・分類索引で検索できる。